

【基調講演】橋爪 紳也 氏

「関西の文化とまちづくり 世界都市と創造都市」



<プロフィール>大阪市立大学都市研究プラザ教授。

1960年大阪市生まれ。1984年京都大学工学部卒業。1990年大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。工学博士。京都精華大学助教授、大阪市立大学文学部助教授を経て、2006年より現職。近代日本における都市開発思想の変遷、都市計画理念の歴史、ディスプレイデザインの技術史的考察等を研究テーマとする。主な著書は「海遊都市 アーバンリゾートの近代」、「なにわの新名所」、「日本の遊園地」、「モダン都市の誕生」、「集客都市」、「につぼん電化史」、「あったかもしれない日本」等多数。

本日は、21世紀の都市の方向性について考えていきたい。

我が国では、少子高齢化が進んでいるが、世界的には、人口大爆発の時代を迎え、巨大都市が生まれている。「都市は問題が多発する場所だから分散するべきだ」というのが従来の考え方だったが、現在は、「人口の受け皿として都市をうまく成長・管理していかなければ人類の将来はない」というのが世界的な大命題になっている。

その中で、巨大都市ではない都市のあり方を示していくのが、少子高齢化が進む日本の使命だ。最近注目されているのが、暮らしやすさ、技術的に特化した街、交通の利便性に優れたセカンドシティだ。昨年度の「ニューズウィーク」では、「最も躍動的な世界の十大都市」のひとつとして、日本では唯一、福岡市が選ばれた。しかしながら、もともと関西にもセカンドシティとして誇るべきものがあつたはず。これからは、東京とは違う土俵に立ち、新しい魅力のあふれるまちを目指していくという機運を盛り上げていくべきではないか。セカンドシティは百万人程度の都市だが、10万、20万人の地域でも、魅力的な場所になることができる。

これから、昨年視察にいったフランスとスペインで、参考になるまちづくりの事例をあげていこう。

LRTという新しい路面電車の導入で話題になったフランスのストラスブールでは、毎年夏に、水路を利用したイベントが行われる。古い建物の壁面をステージに、歩行者天国にした対岸の道から楽しむ。水路全体が劇場になる。エンターテインメント性の高い噴水のノズルの特許や技術を持っている会社が、この街にあり、光と噴水が効果的に使用されている。文化と地域性を生かし、地域の産業のアピールにもつなげている点が個性的だ。



フランスのナントは、クッキー工場の跡地を、ギャラリーや劇場があるアートセンターにしたことを契機に、今年から2年おきにロワールエスチュアリーというアートイベントを開く。ナントからサン・ナゼールという街までの約60kmにある川をアートギャラリーとし、川に人々の意識を向けたいという試みだ。アフリカからの奴隷を受け入れ、奴隷売買で繁栄した否定的な歴史を背負っている川の物語をアートを通じて再構築しようという発想が印象的だった。

フランス第2の港湾都市ルアーブルは、第二次大戦でドイツに占領され、140数回の爆撃を受け、戦後、鉄筋コンクリートのビル街に復興された。この街全体が一昨年、世界遺産になった。コンクリートの塊がこれほど美しいところはないのだという評価にがらっと変わり、戦後五〇余年、自分のまちに対して誇りを持てなかった人たちが誇りを回復した。日本では、1950年代にできたまちで、世界遺産になるような例はなかなか思いつかない。しかし、我々は、50年、百年先の次の世代の文化財となるようなものを渡していくことが大事だということに気づかされた。この街でも、街じゅういたるところを舞台にし、暮らしに密着したスタイルで、4日間演劇が行われ、私自身も非常に感動した。世界中からも多くの人々が訪れている。

以上の事例でもわかるように、フランスやスペインでは、街ごとに、ほかではやっていない新しい発想で世界的にも評価されるものを生み出そうという意欲に満ちている。また、その発想や取り組みをきっかけにして、人々の意識ががらっと変わる。そのまちで大事だけど忘れていた物語や、まちに対する評価が変わる。その変化がとても大事なことだと教えられた。

関西も、本来は物まねよりも、世界中、日本中のいろいろな事例を見ながら、創意工夫を加えて取り入れるのが得意な地域だったと思う。今こそ、その特長を存分に生かすべきだ。まちづくりの上でも、関西は、先ほどからあげた事例のような、その地域の歴史と文化、産業を背負った街、つまり、創造都市（クリエイティブシティ）を目指すべきではないだろうか。

創造都市をごく簡単に定義するなら、文化、産業ともに独自のものをどんどん生み出し、地域の課題に対しても創造的に問題解決を行えるようなまちのことである。

従来は、日本中が同じ仕組みで、同じ問題に対して同じように解決するのが合理的であるとされてきた。確かに戦後の高度経済成長期においては、それが合理的だったが、これからは、全国統一の基盤の上にならなくて、さらに新たな地域ごとの提案実践を重ねていくという発想が求められてきている。

創造都市というのは、職人や伝統が残っているだけでなく、ものを生み出す力のある人たちが魅力的に感じ、集まってくる場所といってもよい。例えば、IT関連のクリエイターが集まり、産業も集まるアメリカのフロリダや、独創的な映画祭を成功させ、たった十数年で映画の街というイメージが定着した韓国・釜山などを思い浮かべるとよいだろう。日本では、金沢市が先頭を走っているように思う。横浜市や大阪市もクリエイティブなまちづくりへの取り組みをスタートさせている。

創造都市を目指す上では、新しい何かを生み出したいと思っている若者たちをサポートできる環境整備も不可欠になってくる。

まちのクリエイティブな魅力を評価する国際創造指標（グローバル・クリエイティブ・インデックス）というのが提案された。①いろいろな人を受け入れ、そこでがんばれるまちかどうかという「寛容性」 ②研究開発費や特許の数、人口あたりの専門家の数 ③技術者、研究者、クリエイターの数、以上の3つを指標として各国を比較したところ、一昨年の段階では、日本は世界第2位という結果が出た。かなり意外な気もするのだが、世界から見ると、日本という国はまだまだ新しいものをつくる力に満ちているように見えているということを表している。その日本の中でも、文化や歴史、地域の個性を浮き立たせることがもっとも可能なのは、関西だと思っている。

これから、世界中で新しい文化的なものを生み出そうとする競争はますます激化していく中で、関西のそれぞれのまちで、文化・芸術に関わる新しい産業を生み出し、街のブランド力を高めていこうという動きを積み上げていくことは、日本全体を元気にすることにもつながっていくだろう。

私が思い描いているのは、関西の至るところで、世界のどこにもなかったような新しいものをどんどん生み出している元気な若者たち、あるいは年配の人たちが群れ集っていて、日

本を背負って立つ拠点へと成長した姿だ。このイメージを現実化するためにも、もっともつと元気を集め、「関西が日本を背負っていく」という覚悟を皆さんとともに持っていきたいと思う。

フランスやスペインでは、自分のまちに対する誇りがある。よそから来た人に対して、地域のだれもが、こんないい街はない、あれも見たか、これも見たかと、誇らしげに「お節介」を焼くのだ。大阪生まれの私自身が、ここまで大阪に誇りを持っているかどうかと自問すると、正直言って自信がない。地域に対する誇りの回復と、忘れられたまちの物語りをもう一度作り直すことが、元気な地域づくりの第一歩になるに違いない。